

Summary, 21 December, 2022

日時：2022（令和4）年12月21日

会場：東京外国語大学 語学研究所

「英語の補文の通時比較」

発表者：浦田和幸（東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授）

本発表では、命令・提案・勧告などを表す動詞・形容詞・名詞に続く *that* 節内で用いられる「命令的接続法」(mandative subjunctive) を中心に取り上げて、補文の通時比較を行った。

通時的に見ると、屈折の単純化とともに、英語の接続法(subjunctive)は直説法(indicative)との形態的区別が困難となり、中英語以降、一部の用法を除いて衰退していった。その実態の一端を、後期古英語訳の『ウェストサクソン福音書』(*West Saxon Gospels*, 1000年頃)、後期中英語訳の『ウィクリフ派聖書(後期訳)』(*Wycliffite Bible*, 1388年頃)、初期近代英語の最初期の『ティンダル訳聖書』(*Tyndale Bible*, 1526年)の各「マタイ伝」における状況を比較することにより概観した。「接続法現在形」に比べて、とりわけ「接続法過去形」の衰退が著しい。

以下、命令的接続法に的を絞り、「マタイ伝」に基づき、後期古英語訳を出発点として命令的接続法の用法の変遷について紹介した。「非過去時」に関しては、後期中英語訳から最初期の初期近代英語訳の間に接続法現在形の減少が見られ、一方、「過去時」についてはそれよりも早く、後期古英語訳から後期中英語訳の間に接続法過去の用法の衰退が見られた。

接続法過去形の衰退が著しい「過去時」の命令的節(mandative clause)については、後期中英語訳以降は接続法節に代わって非定形の不定詞句で表現されるか、あるいは、後期中英語訳と最初期の初期近代英語訳では(形態的に接続法か直説法かの区別がつかない)接続法/直説法節に代わって法助動詞節が用いられ、現代英語訳では不定詞句によって表現されている場合が多い。すなわち、屈折の単純化に伴い接続法過去の語形が衰えるにつれて、より明示的な法助動詞が代替表現として用いられ、一方では、不定詞による非定形節で表現される場合が増えた。

また、命令的節とは別に、英語の補文構造一般の通時的変化の傾向に関して、「大補文推移」(Great Complement Shift)と称される近年の観点(Cf. Günter Rohdenburg 等)について言及した。¹⁾

注1 Cf. Rohdenburg (2006: 145): “Over the past few centuries, English has experienced a massive restructuring of its system of sentential complementation, which may be referred to as the Great Complement Shift.” (下線は引用者)

(Rohdenburg, Günter. 2006. “The Role of Functional Constraints in the Evolution of the English Complement System.” *Syntax, Style and Grammatical Norms: English from 1500-2000*, edited by Christiane Dalton-Puffer et al., Peter Lang, pp. 143-66.)

本発表は主に下記の知見に基づく。

・浦田和幸. 2023. 「英語における命令的接続法の通時比較—「マタイ伝」を資料に」. 『関東英文学研究』, 15号, pp. 21-29.